

「やがて実質的には、李先念・華国鋒と逆転して行くのではないか」——これは柴田氏の意見。これに対し「党主席の地位は大きく華体制は強力なものとなるう」——というのが中嶋氏の見通し。今回の「政変」を予測した数少ない中国通のエキサイト対談——。

陰謀は黒いベールの中で

——まず、クーデターの起きた遠因、背景からお話し願いたいと思います。

中嶋 一般に、新聞論調などでは、毛沢東が亡くなって、党主席をめぐる人事の問題がこじれてこういう事態になった、あるいは、党主席はうまくいったけれども、首相、副首相の問題をめぐつ

てこうなった、とこういう見方があるけれども、私は、そうではないと思うんですね。つまり言葉は悪いけれども毛さんの「死に待ち」というような状況があった。それまではうまく團結していたのが党主席選任でこじれて、というようなものじゃなくて、すでに王朝の中核において、まさに食うか食われるか、というそんな状況が準備されていたんだと見た方がいいと思うんです。私は、文革派を上海グループと非上海グループに分けて考えるんですが、非上海グループというのは、汪東興や華国鋒ですね。江青夫人が毛沢東と結婚したのが三九年ですが、それ以前、延安時代から毛沢東の側にいたグループですね。林彪もそうでした。そういう人たちは、いずれ毛沢東の宮廷

派の江青を中心とする人たちに排除される運命にあった。文化大革命を通じて、江青グループあるいは上海グループが政治をほしいままにしてきた。今度は、そのリアクションが出てきたということですね。ですから、今度の事件は、いわば反文化大革命といった方がいいんじゃないか。これはまた文化大革命がいかに定着していなかったか、ということも示しているわけですよ。文革派というのが、いかに丹頂鶴であったかというところが明らかになったわけです。一時的には政治の中核にあつて強かつたけれども、それは言論機関とか一部の生産拠点を握っていただけで定着していなかった。

しかし、もつとミクロに見ると、文革派だつて都市民兵を持っていたし、天安門事件を鎮圧した力もあつた。そこで、汪東興、これは八三四一部隊という文革派を守っていた部隊を握り、同時に中央警衛所というシークレット・サービスの責任者だつた人物なんです。この人物の動向に私は注意していたんです。この証東興がどうも捕まつた様子がない。彼は上海グループじゃない。最後の段階で寝返つたんじゃないかと思うんです。つまり江青夫人のボディガードからして、必ずしも江青夫人に従う状況じゃなかった。

柴田 私も大体同じような見方ですけれども、江青がこういうふうになるのはある程度予想できたと思うんです。というのは、江青たちの危機感が、我々の想像以上に強かつた。

毛沢東が死ぬ前から、江青たちには、毛沢東以後自分たちがどうなるかという危機感がずつとあつたわけですね。孔子批判とかプロレタリア独裁理論の学習とか、いろんなキャンペーンを通じて、毛沢東の生きていこううちに権力を掌握しようという努力を続けてきたわけですが、その根底には危機感と権力欲がずつと流れていた。それが毛沢東の死によつて頂点に達した、ということですね。

文革派にとつて「頼みの綱」の毛沢東の指導力は次第に弱ってくる。いまあがつているいろんな情報によると、数か月間毛沢東と他の指導者を会わせなかつたと

緊急対談

華体制の今後を推理する

(サンケイ新聞論説委員) 柴田穂 VS 中嶋嶺雄 (東京外語大助教授)

●これからの中国はどうなる



写真上・柴田氏、下・中嶋氏

か、毛沢東の指示を改ざんしたとかいわれていますが、そういうことができたということは、とりもなおさず毛沢東の弱り方が相当なものだった、ということですね。

第二には、彼らは党政治局を握るような多数派ではなかった、ということですね。私は、今度の政変が起こる以前、彼らは政治局二十人のうち八票とればいい方だと思っていた。ところが、英国の『ザ・ガーディアン』によると、七票しかとれなかった。政治局でもこの弱さ、これがまた危機感を煽り立てた。

もう一つは、華国鋒の評価ですね。華国鋒が毛沢東の指名によって出てきた文革派であつたら、江青たちのこういう行動もなかったかも知れない。ところが、

華国鋒は、政治局の中の穏健派と急進派の角逐の中から、中間派として浮かび上がってきた、自分の権力を維持するために次第に穏健派に傾いていった。特に軍に依存するという傾向が強まってきた。これが非常にはつきりするのが四月から六月段階だと思つてますよ。例の四月の天安門事件の頃ですね。あの騒乱の火つけ役が文革派、江青たちに結びつく極左グループが挑発・煽動した。

そこで、四月七日の政治局会議は、華国鋒が穏健派にパツと近づいた時期だと思つてます。そうすることによって、鄧小平の党籍は剝奪しないという程度のところにとどめ、華国鋒は王洪文を押えて党第一副主席に立つ。

文革派は六月ぐらいから、上海の民兵

を中心に巻き返しのチャンスを狙う。それに対して華国鋒は、穏健派と完全に連合して、文革派を押え始める。これが六月上旬ですね。ニクソン訪中で、アメリカに非礼だったと謝つたりした時期ですが、こういうことは、穏健派優勢じゃないとできないわけです。

六月にそういう決定をした後、まさに両者は対決状態になる。この時に具体的に江青らの権力奪取計画が立てられたと思つてます。この頃は、毛沢東はもう相当弱つていたでしょう。

ついに毛沢東が死んで、その遺体の側で黒いベールをかぶりながら、江青女史は権力奪取の陰謀に思いをめぐらしていたんでしょ。

いた非常な危機感が、毛沢東の死で絶頂に達して爆発したわけですね。本来はもう少しじつとしていれば生き延びられたし、また周恩来がいたら、もつと江青を敬して遠ざけるといふ、うまい方法をとつたんだらうけれども、それもなかったために、両者の激突が非常に深刻な状態になって、ついに破れたということだと思います。

権力の亡者・江青の野望

中嶋 上海グループの戦略が、そういう点では、江青女史のあまりにも強い党主席への執念のために裏目に出たともいえると思つてますよ。江青が主席になると、二月段階でクローズアップされてきた華国鋒の行き場がないわけでしょう。天安門事件で第一副主席になって、そのあとは——という気持ちでいるところへ、江青が主席じゃ華国鋒のイスがなくなる。

華国鋒が一応主席になって、江青女史は一步下がりを、張春橋あたりを國務院総理に、というようにすることにでもしておけば、事態はこんな激突にならなかつたという見方もできないことはないんです。柴田さんがさつき言った、焦つていたという問題ですね。これは一月十五日の周恩来に対する鄧小平の弔辞以来ずっと焦つていたと思つてますが、その焦りのあまり、いろいろなことを画策しすぎた。画策しすぎて裏目に出た。

柴田 やはり問題の一つは江青女史の権力欲ですね。北京から流れてくる情報で、雙新聞の傾向は張春橋を一番の悪者にしようという意識的操作があります。張春橋が本当の首謀者であつて江青女史らは単なるピエロだったというような、ですね。しかし、江青女史には相当大きな権力欲があつたと見るべきじゃないか。

七二年頃、毛さんが弱つてきて、林彪は失脚した、周恩来はガンにかかつている。こういう状況だと、次はアタシの番だ、と思い始めてもおかしくはないわけですね。この頃、七二年に彼女は、アメリカのウイトケ女史を招いて、長時間のインタビューをやり、自叙伝を書かせようとしています。いわば『中国の赤い星』（スノー著）や『偉大な道』（スメドレー著）の『江青版』、毛沢東や朱徳と並ぶものを自分も作ろうとした。

このインタビューの中で、他の指導者が困るようなことを平気で語り、毛沢東と結婚したのは好きでしたんじやない、半ば強制的に結婚させられた、みたいなことも言っているわけです。つまり、この頃すでに江青は権力に向かつて、毛沢東も離れて一人歩きしているということが窺われるわけです。

ですから、これ以後の状況というものは、毛沢東の意思で中国が動いているんじゃない。片や毛沢東からほとんど政策を任されている周恩来と、片や権力欲に

取りつかれ毛沢東以後に執念を燃やす江青一派の闘いであつた。

というふうに見ますと、四月の鄧小平復活についても、毛さんの〇五が出ていながら、江青たちが反対する、また七三年八月の第十回党大会が周恩来、ベースで進んでいるのに対して江青一派は孔子批判などを巻き起こして反対した。七五年一月の全人代では周恩来が演説し、鄧小平を筆頭副主席にするということをも毛沢東の了解を得てやっていたのに、江青女史らが反対して毛沢東を大会に出席させないという陰謀を企んだ。これらの事実の脈絡がよくわかるんですね。毛沢東の意思を越えて独走し始めた。

このように権力の亡者になってくると、緻密な計画が立てられなくなり、あつちこつちがずいぶんお粗末になってくるわけです。

たとえば、今度の政変に際しても、文革や毛沢東思想の定着を過大評価していた。文革は大成功で毛沢東思想は定着しており、毛沢東の意思を一番模範的に継承しているのは江青たち文革派の指導者である、というような見方をしてきた人たちもいるわけですが、その人たちは困っているでしょうね。江青たちに誰も支援に立ち上がらなかつたわけです……。

中嶋 文革の評価については、いま言った人たちがそうですが、台湾の見方も間違っていたと思うんですよ。台湾は、文革派がやってきたこの十年は無視

できない、という見方をしている。はたしてそうか、実はそれほど定着していません。かつたんですね。

その意味で華国鋒はズルイ、というか、よく見ている。江青や文革派がやってきた過去十年の悪政、中国の民衆にとってはまさに文革は悪政だつたと思うんですが、その反動で、華国鋒は、はずみがつくというか力を得ることを狙っている、そういう立場に自分を置こうとしている。こういうことですね。その意味で決定的なのは天安門事件だつたと思うんです。あの時に、華国鋒は、これにも文革派についていたら危ない、と考えた。

天安門事件のエネルギーというのは、驚天動地のものです。あの中国の首都の北京で、あれほど嚴重な警戒があるにもかかわらず、数十万人、延べ百万ともいわれる人が集まり、そして十数万人が暴動に立ち上がった。これは、まさに造反有理で、毛沢東政治に対する批判であつたわけですね。当面は文革派、上海グループに対する批判であつた。ここである種のナダレ現象が、文革派の中で起こつたと見るわけです。つまり江青夫人らについていたら危ない、という……。毛沢東が亡くなつていよいよよそなつた。そこで、華国鋒は、そのナダレ現象の方に乗つた、ということだと思つてます。

柴田 江青女史には、そこらが見えなかつたわけですね。政治の潮流が逆転し

た時、なお逆流に竿さして刃向かうことは、そもそも中国人のとする態度でない。きわめてリアルな、日和見かもしれないし、体制順応かもしれないけれども、そういう民衆に対するリアルな見方がなかつた。毛沢東も江青女史たちも、民衆に対する一種の過大評価があつたと思えます。

特に江青女史は宣伝部門、ないし大学の文革派の連中からおだてられ祭り上げられていて、リアルな分析もできないでいた。彼女自身が戦略職術のわかる政治家でないということになると、いかに張春橋たちが側にいようと、権力奪取計画が穴だらけにならざるを得なかつた。よく分かるような気もしますけどね。

政変の鍵握る解放軍

中嶋 さきほども触れましたが、文化大革命というものがいかに長い間、中国の民衆を苦しめてきたか、その過程で江青グループ、上海グループがいかに政治をほしいままにしてきたか、これに対するリアクションがいま起こっている、マクロに見ると、こういうことだと思えます。そういう状況下で江青女史らは置かれていた。ところがミクロに見た場合にも江青グループは浮き上がっていたわけですね。さつき言つたように、江青夫人のボディガードまで、寝返つていたという……。

汪東興の率いる八三四一部隊という、

●これからの中国はどうなる

いわば近衛兵、親衛隊が駄目になっていった。同時に、いち早く手兵として持っていた都市民兵は、倪志福あたりが指導していて、江青夫人の配下にあつたんですが、彼らはもうやられていた。そういう危機をようやく察知した江青グループは、瀋陽部隊の毛遠新を呼び寄せようとして果たせなかつた。

柴田 汪東興が向こうについたとすると、北京の民兵、上海の民兵、そして瀋陽の毛遠新の援軍、これしか彼らには武装力はないわけですね。

ところが、九月ぐらゐの段階で、解放军はすでに民兵を押えてしまつていたと思つて居る。その解放军に華国鋒は依拠した。河北地震のときの華国鋒の演説でも、解放军に対する評価は非常に高い。民兵は演説の中であんまり出てこない。華国鋒の陰で、解放军と民兵の主導権争いが進んでいた。華国鋒はそれを百も承知していたと思つて居る。彼にとつては、解放军に進出するチャンスだつた。

中嶋 人民解放军、つまり正規軍からすれば、民兵なんかに武器を持つてもらうのは、非常に危ないことである、と思つていたでしょうからね。現に民兵に重火器まで持たせていたわけですが、人民解放军は、それを決して快く思つていなかった。このことが今度はつきり出たと思つて居る。

柴田 ここで、ちよつと中国の民兵の性格を考えてみますと、民兵というのは

労働者なんです。学生、農民の民兵もありますけれども、今度の文革派が依拠しようとしたのは、まさに都市民兵ですね。これは労働者です。

結論を先に言いますと、その労働者の利益を、文革派が保証したかというところ、そうでなかつた。したがつて、労働者の都市民兵はソツポを向いて、江青グループ支援に立ち上がらなかつた。こういうことですね。

そこらのいきさつを振り返つてみますと、周恩来が全国人民代表大会で出してきた経済近代化の方針があります。それを、鄧小平が、四つの近代化という形で出したわけですが、中身は同じものです。この方針は、全国人民代表大会で可決された憲法に盛り込まれている。その内容は、農民には自留地を与えて副業を許す、といつたゆるやかな路線ですね。劉少奇なき劉少奇路線と言つていいと思つて居るけれども、そういうゆるやかな路線に対して、文革派は猛烈な攻撃を加えた。ブルジョアの権利を認めるもの、というわけですね。

そういう文革派が、労働者や農民の利益を代弁できるだろうか、というふうな労働者たちは考えたでしょう。

確かに、文革で旧幹部派对新幹部派の労働者の派閥抗争があつて、武闘をやり血を流し合いました。その恨みが、労働者の中に、派閥対立として残つて居ます。しかし、それより労働者にとつて重

大なのは自分たちの利益ですね。自分たちの真の利益を代弁するのは文革派ではなく、物質的刺戟を考慮に入れた経済政策を出している穏健派だということは知つて居るわけですよ。だから、今までは仕方なく従つていたけれども、今度は政治の風向きが変わつたから、一番先に江青にソツポを向いて支援に立ち上がらなかつた。その点は、実ははつきりしている。中国の民衆は、日本人みたいにロマンチックとか心情的ではありませんからね。

いかに毛沢東が大衆運動の指導者といひ、あるいは江青グループが大衆に依拠した、と称しても、こればかりはどうにもならなかつた。大衆運動とか大衆に依拠するといふことは、何もスローガンやイデオロギーで大衆を引っぱつていくことじゃなくて、あくまでも彼らの労働意欲をかき立てるような物質的刺戟を与えなきゃならん、といふことは、ソ連の社会主義の経験で十分わかつていたはずなんです。それをなお、毛沢東の禁欲主義で引っぱつていこうとしたんだけれども、もう限界にきた、誰もついていけない。

昔、我々は他国に侵略された半植民地であつた、封建的な隷属状態に置かれていた。だから昔のことを思い起こせば、今はこんないいじゃないか、とこんなことをいくら繰り返してみても、新中国が成立してから三十年近くたとうとして

いるんですからね。新中国になつてから生まれた人が大部分を占める時代になつてきているんです。昔のことを思い起こして比べるよりも、一九四九年からどれだけ良くなつて居るかということが問われるわけですよ。

ここに、労働者が民兵という形をとると、根底的には文革派の支持勢力ではなかつたという理由があります。

ところが、江青のまわりには宣伝機関があり、地方都市の指導部の中には新幹部がいる。あるいは北京大学や清華大学の中にシンパサイザーがいる。これらが、民兵は我々の武装勢力だといふ過大評価を江青らにさせてしまつた。

それがまさに認識不足だつたというところが、江青の危機という決定的な時点で誰も立ち上がらない、という形で示されてしまつた。

ここには、中国人の政治に対するリズムが見られると思つて居る。王朝がどう変わろうと、中央政府がどうなるうと、自分たちの生活というものに対する個人個人のきわめてリアルな対応を失わない。これが、結局、毛沢東、および江青を見放したんでしょね。

華国鋒は特務出身

中嶋 さて、そこで華国鋒論ですが、ある程度は、そういう中国の民衆というものを知りながら、反文革に賭けたといふことだと思つて居ますが、彼自身について

は、一般に経歴がよく分からないといわれている。が、私がこの間来いろいろ調べてみましたら、だいぶいろんなことが分かってきたわけです。

生まれは、本人が山西省と言った、などと言われていますが、これはあまり根拠がないですね。そういうふうに言った、ということが間接的に伝えられているにすぎない。

私は、やっぱり湖南省生まれではないか、という気がするんですよ。この間テレビでやっていた華国鋒の中国語を聞いてみました。確かに北京訛とは違いますが、湖南訛か山西訛のどっちだという、この二つはそんなに違わないと思うんです。山西訛だから山西というわけにはいかない。

いずれにしても、私の考えでは、仮に山西生まれであっても、毛沢東の故郷（湖南省）でずっと活躍してきた、ということなんです。これが非常に大きな政治的資質になっている。湖南省に二十年間いますからね、林彪事件で中央に呼び寄せられて、その処理をするまで。

じゃ、湖南でどういふことをしてきたか、という、農民工作をやっていた。農民工作とはいうものの、実際には農村工作より統一戦線部とか組織部という一種の特務が彼の仕事だった。中国の場合、統一戦線工作部というのは、党外人種との協力を進めるといふこともありますが、より大きなもう一つの側面は、そ

ういう黨員と党外の人々がどう活動するかを、裏から監視する、そんな役割があるんです。

華国鋒は、そういう組織部とか特務を一貫して歩いてきた、彼がこれまでほとんど表に出てきていない、あるいは前半生が分からないということの理由は、実はこの点にあるんですね。

六十五歳とか六十四歳とか言われ、六十代を過ぎていたのは確かかなんてしょうけれども、それだけの人間でありながら、その前半生が分かっているというものは、彼の持っていた特務的、公安的な性格によるものと思えない。かなり暗い陰がある。

であるが故に、彼は林彪事件の処理を任されたのだらうし、であるが故に、去年の一月以来公安大臣になったんだらうと思うんですね。

そういう華国鋒の経歴からすると、今回の事件も分かりやすくなるような気がします。軍が動いてなくて、北京の中枢でボサッとこういふ事態になったわけですからね。

一部の新聞記者などは、勘違いして、華国鋒は、例の大衆会議で演説したから農村工作に非常に優れているとか、彼は毛主席と同じ土臭い手をしており、中国の土、というものを匂わせる雰囲気を持っているとか、いろいろ書いていますが、僕は、それらは全然虚像だと思っんです。大体、大衆の演説なんていうのが、

左の江青と右の鄧小平が対立したので、中間からバランス派として華国鋒が演説したというだけのことです。今までの彼の経歴の中で、彼がスキ、クワを持って農民工作をやったというのはほとんどないんです。

華国鋒のイメージというものを、こちらでもう一度考え直してみる必要があるんじゃないか。

しかし、そう見てくると、別の意味で華国鋒は隠然たる力を持っているというふうに見えるんです。今後、将来的にも安泰であるかとか、周恩来や毛沢東みたいな指導力を持った人物であるか、という、その点ではだいぶ疑問ですが、にもかかわらず、今回の出来事は、やはり華国鋒が処断したことになりますから、このことによつて、中国の新しい夜明けの時代を作ったということにすれば、華国鋒に対する評価は、時間とともに高まるんじゃないですか。

柴田 華国鋒論について言えば、今の大体正しいと思います。ただ、中国で一國の宰相というのは特務経験だけでは駄目だし、農業問題、地方行政だけでも駄目なんです。といって彼が周恩来や毛沢東に匹敵するような指導者であるとは、もちろん誰も思っていない。つまり、彼一人で、他の指導者の協力を得ないでやれる状況にはない。結局、彼がよつて立つところは、特務もあるけれども、いわば中間派として出てきた、という面

すね。

それから、軍の支持も薄いと思うんですよ。だから、葉劍英、李先念、李先念に近い陳錫聯といった人々の協力があってはじめて、四月七日の政治局会議や六月上旬の毛沢東の会見停止がやれた。彼が、特に李先念や軍幹部にそういう形で依存しているという点は重要な要素だと思ふ。

これからの問題の発生いかんによつては、はたして李先念なしでやれるかというふうな場面も出てくるかもしれない。華国鋒が党主席に上ったことが、彼の権力を示すものかどうかという、まだそうは思わないんですよ。

党主席の値打ちというのは、それほどものではないと見るわけです。

林彪の例で見ますと、彼が毛沢東以後に対して非常に大きな危機感を持ったのは、党の指導力というか権威がなくなつてしまつたからなんです。今までずっと毛沢東でやってきて文化大革命で党組織を破壊し尽くした。毛沢東が党への造反を呼びかけ、民衆の中には党への忠誠心、服従心というものが相当弱まつた。未だに党中央機構の中で書記局があるかないかという状態でしょう。周恩来が意識的に、政府の上にある強大な党中央機構を作らせないようにした、と僕は見えています。林彪にしてみれば、そんな党の副主席だけでは心配なわけですよ。何とかして国家主席として周恩来の上に立



北京天安門前の華主席支持百万人デモ (10月24日)

たなければ実権は持てないと考えた。

こういふふうに党中央はあまり強くないわけですよ。そういう弱体化した党の主席ということですからね。華国鋒が党主席になったといつても、彼の権力が一歩進んで強くなったとは考えられない。これに対して、首相の地位が周恩来時代から大きくなってきている。江青たちが、鄧小平が首相になることに反対したのもそうです。もし党主席が全権を握り、首

相を押えていけるものならば、鄧小平を首相にしたってよかったですよ。

華・李体制が生まれる？

中嶋 私は、党主席の見方については、少し柴田説と違うんだな。中国で「マオ・チュー・シー」というのは大変な言葉なんです。陛下」という感じの言葉です。この言葉の持つカリスマ性というのは大変なものでしょう。柴田さんがい

ま言われたように、党中央機構がガタガタであるというのは、まさにそのとおりだと思っんです。実務書記局は、今まではいわば王朝の中で非常に陰湿な形で宮廷的に形成されていたわけですが、組織がそういう手足のない形であるだけに、逆に主席の地位が絶対のものであったともいえるわけですね。

今回の場合でも、制度的には依然として党主席にすべてが集中するようになっていっているんですよ。周恩来という類い稀なる政治家、もう二度と出ないような政治家によって國務院総理という地位が担われていたことから、主席の地位の相対的低下という柴田説が成り立っんです。

しかし、周恩来ほどの人物はもう出ないでしょう。そうすると、制度的に、すべてが党主席に集中している、ということの意味は大きいと思っんですよ。党規約や憲法を改正しない限り、これは変わらな

今度の問題も、単に主席選任問題じゃないという点では、柴田さんと一致するんですが、にもかかわらず主席の地位をめぐって、これだけの抗争が起こっている。やはり党主席というものの地位が大きくて、誰が握るかが決定的な問題になる、ということを示していると思っんです。と、いうこと、華国鋒が第二の毛沢東になり得る、ということではないですがね。

柴田 まあ、彼にも権力欲はあるだろ

うけどね。

中嶋 そのへんが、華国鋒の将来の安定性というものが、まだちょっと断定できない。

柴田 マオ・チュー・シー」という言葉ですね、これは、主席という地位が高いということより、やはり毛沢東だから、だと思っんですよ。毛沢東なるがゆえに主席の地位が高かったが、党主席そのものの地位は、かつての主席より非常に弱い。現段階での党主席あるいは副主席というものは、必ずしも実権や指導力を持ったものとは言えない。王洪文なんか党副主席だったんだから、もつと背景があつてよかつたんだらうに、何もなかったでしょう。華国鋒にしても、第一副主席になったのは、党内の序列が上がついていったんじゃなくて、彼が首相になつたから第一副主席になつたわけですね。つまり首相先行です。党は政府を指導できるような能力がない。これが文革のもたらした一番大きな後遺症なんです。

そこで、話を先に進めますと、おそらく李先念が首相に座るんでしようけれども、そうなると、党主席華国鋒より李先念首相の方が実権があるらうと、私は見るわけです。

李先念は小型周恩来といった趣のある人物ですから、たくみに華国鋒という隠れみのを使って実権を握っていくのではないかと。しかも、李先念の方には、陳錫聯を中心とする第二野戦軍系統の幹

部グループ、湖北省黄安県出身グループというのも控えている。それに国務院、李先念は周恩来の残した弟子みたいなものですからね。

華国鋒は、特務を握ってるかもしれないけれど、こうした李先念の背景には及ばない。

だから、華国鋒体制という言葉はそろそろ変えなきゃならない。華国鋒・李先念体制、華・李体制というのが間もなく来るんじゃないかと思うんですよ。もしかしら、李先念はもう首相に決定されているかもしれないね。

華国鋒は、李先念と軍にもたれかかっている指導者であり、ちよつと李先念よりは小粒である、というふうに見てゐるんですがね。

中嶋 非常にユニークな説だと思えます。しかし、私はそうは見ませんね。行政力という点では華国鋒はまだ未知数だし、李先念のそれは大きいとは思いますが、しかし、華・李体制というふうには見ないですね。

私は、もしあるとすれば、陰の黒幕は鄧小平だと考えています。

周恩来の後継者は鄧小平

柴田 鄧小平がすぐ出てくるかどうか、という問題ですね。いま仮に華国鋒が党主席で李先念が首相だとすれば、鄧小平が舞い戻ってくる場所がないんですよ。だから、もうひと波乱あるかも

れない。したがって、いまずぐ出てくるということはないんじゃないか。

もう一つは、彼がこの間再失脚した時点で、どういふカラクリがあったかという問題がありますね。これも鄧小平復活を占うカギになる。鄧小平と華国鋒が一種のライバル関係になっていて、鄧小平が落っこつたんだとすれば、今度の復活は非常に難しいことになる。

それと、いわば逆の場合もあり得ます。鄧小平の全職務は解任するけれども、党籍剥奪はしないという、あの決定ですが、あの時、李先念や華国鋒、あるいは軍幹部たちが、一種のコンセンサスで、この際江青おばさんがうるさいから、ちよつと鄧小平を引ッ込めておこう、としばらく休んでもらって、毛以後再び出てきてもらおう、という暗黙の了解を鄧小平との間にもつけていたとしたら、鄧小平復活は比較的早くなりますね。そのころは、まだはつきりしてない。

中嶋 鄧小平は、心境としては、オレは黙ってるよ、と言いたいと思うんですよ。さんざん揉まれて……。

柴田 政治はもうイヤだと言っているとも伝えられてるね。

中嶋 揉まれて、結局鄧小平は最後まで悔い改めなかった。その鄧小平の気持ち、民衆の間にはずいぶん浸透している、どう転んでも鄧小平路線というものが、路線としては生き残っていくような感じがするわけです。

鄧小平は、去年から今年にかけて、必死になって走資派路線といわれたものを、三つのプログラムを作って、四つの現代化、をやるうとした。あれは、どこかただごてない様子がありましたね。彼は、中国をどういふふうにしなきゃ、もう駄目になると考え、最後のエネルギーを、あそこに賭けたわけですね。

たような気がします。ですから、逆に言う、彼はあまりポストを要求していません。だから、平気で何でも言えた。ひとに悩まれるような、ひとこと多いようなことをズバズバ言ってたわけですからね。

柴田 周恩来と同じような使命感ですね。

柴田 いずれにしても、もう少し様子を見ないと、鄧小平の復活ははつきりしたことは分らない。華国鋒の先行きと密接にからんでいることは間違いない。

中嶋 そう。それで、あの時最後まで悔い改めなかった。しかも、党籍が残っていた。というのは残さざるを得ない事情があったのでしよう。全体として考えてみますと、どうもさつき柴田さんが言った、何らかの暗黙の了解があつて、時に鄧小平、お前、悪者になってくれ、というように形で引ッ込んだ可能性も強い。鄧小平が引ッ込んだ時期の状況はいま言った鄧小平が異常なエネルギーを走資派路線に賭けていたわけです。そんな状況の中で、そういう暗黙の了解があつたとすると、意外と鄧小平の復活は早いかもしれない。

ただ、そんな場合になつても、鄧小平自身は、もうそんなに権力欲を持たないかもしれない。鄧小平は、権力欲というよりは使命感だと思うんですよ。自分は今も十分に踏みつけられた、それでもなお毛沢東政治は直さなきゃいけない、文革派のわがままを叩きのめさなきゃいけない、という使命感ですね。これがあつた。

毛思想より賃金値上げ

中嶋 そこで、華国鋒体制はどうなるか、という問題ですね。華国鋒自体の安定性というものが大きく問題になつてくる。とにかく現在は一種の嵐の時期ですから、みんな一緒になつて文革派をやつた。だけど、中国共産党のリーダーたちは、決して仲良しクラブを作るような人たちがいないし、クラブでもサロンでもないわけで、激しい権力闘争、路線の角逐の上で暫定的に連合しているにすぎないわけです。

そうすると、この動きはどこまでいくか。まず第一段階は文化大革命の否定にいくんじゃないか。日本の論者の中には、いまもつて文革は正しかったんだ、江青たちが逸脱したんだという見方があるようですが、これは中国では通用しない論理だね。文化大革命というものがかなり無理をやつて民衆の間から批判があつた。そして、それをやってきた張本

人たち、陳伯達、林彪、江青、姚文元、張春橋、王洪文と、全部失脚したわけだ。

当面、言葉の上で反文革とは言わないだろうけれども、実際としては反文化大革命というところまでいくでしょう。

ここに一つ注目すべきデータとして、「人民日報」の社説があります。十月一日の社説では、文化大革命を大いに推し進めよう、劉少奇、林彪、鄧小平批判運動を広めよう、という内容で、文化大革命という言葉がいつばい出てくる。

柴田 文革派の最後の社説ですね。

中嶋 そうです。ところが、十日に三紙共同社説が出る。ここでは文化大革命という言葉は一回しか出てこないんですよ。それも、大いに推し進めよう、じゃない。文革の輝かしい成果を守り、と、もう完全に過去のこととしてしゃべっている。文化大革命への訣別ですね。

これがさらに進んで、文革からさらに遡り、一九五七年頃までいって、毛沢東批判が進められる。一九五七年以来の毛沢東政治に批判が加えられ、いわば非毛沢東化がそこまでいくだろう、と見ているんですがね。

そこいらで、もう一回大揺れ、亀裂が起る。これが今後の中国を占う一つのポイントではないか。

柴田 僕は、それはもつとずつと先だろうと思いますよ。いま指導者たちは、内部で対立を起すような余裕はない。

それより党と民衆、政府と民衆の矛盾の方が激化している。これをどう安定させるかが先決でしょう。それには継続革命とか階級闘争だとか言ってみても始まらない。

やはり民衆を引きつける経済政策だと思えますね。一九六三年以来凍結されている賃金を引き上げて購買力を高めるとか、ですね。そうしないと民衆を引きつけられない。引きつけられないと混乱が起る。混乱のきつかけを作らないために、当面は江青たちに批判キャンペーンを続けたりする。

毛沢東思想、あるいは毛沢東に対する批判は、これら当面の課題が失敗した場合に出てくると思えますね。

当面の課題の解決に失敗して、下部の混乱が上層部にはね返ってくる、その時に華国鋒体制の再編成とか、それにもなう文革批判、さらに毛沢東への批判へとエスカレートしていくのではないか。

だから、そういう混乱をどう安定化できるかが、華国鋒の生き残れるかどうかの試練になると思うんです。

中嶋 もちろん、私も、言葉の上で文革は間違いだつた、みたいなのがすぐ出てくると言っているのではありません。なし崩し的に、そういう方向に進んでいるということですよ。

いまは、このドラマが衝撃的すぎて、ある種のナダレ現象なんかも起こしていますが、ちょっと振り返ってみると、全

く価値の転換が行われているわけですからね。時間がたつてくると、これは大変なことである、と。この驚きと動揺は、では明日から一致団結して経済建設に、という具合にいかないほど深刻だと思わんのですよ。深刻な事態が当分続くんじゃないかと思えますね。

中ソ接近に苛立つ米国

柴田 そこで、今後の中国の動きを眺みながら、ソ連やアメリカの出方というのに触れておきたいんですが、僕は一応これからの展開のテンポはのろいと思わ

中嶋 ソ連にとっては、毛沢東はいなくなり、文革派はいなくなりで、言うことないですね。それで非常にはしきぎ始めている。そういうソ連を中国内部で受け入れられるかどうかですが、中ソ関係がすぐに改善されなくても、少なくとも改善の可能性は出てきた、ということで、ソ連は非常に動くであろう。

それを見越して、アメリカが動くと思わんのですね。ソ連にやらないために、いろいろのアプローチをする。僕は前から言ってきたんだけど、米中軍の提携などというのも出てくるかもしれない。

シュレジンジャーが行って軍事的なアドバイスをしたり、というのはいまやられているんですからね。特に中国の軍部をソ連にやらせないためのアプローチですね。

柴田 僕が、もうちょっととテンポがのろいだろう、と言うのはね、一つは中国内部の事情、党内にブルジョア階級がいて、これと闘争するんだという毛沢東理論が神通力を失い、空洞化されてきていますね。それに代わって極左批判が出てくると思わんのですが、その段階までは、最大の敵ソ連に対する批判は続く。しかし実質的には軍事緊張は凍結、言葉の上だけで激しくという形になるでしょうからね。

もう一つは、当面経済建設をやるわけでしょう。そのためには、ソ連に寄れば西側関係が弱まる。西側優先でいくためには、中ソ対立は続けておいた方がいい、という計算も出てくるでしょう。

それと、中ソ対立の一番の問題は、今中国境ではなくて、アジアにおける外交ヘゲモニー争奪戦ですよ。それは、ちょっと短期間に片づくような問題じゃない。

あれこれの条件を考えてみると、中ソ・米の関係は、中米が中ソよりちょっと短いほぼ正三角形に近い形でしばらくいく、と思えます。中ソ蜜月時代なんのに戻ることはあり得ませんね。

中嶋 それはそうです。中ソのルネサンスというのもないですよ。しかし、いま柴田さんの言った程度の関係、ある種の等距離的なものに近寄るだけでも、これは大変な地殻変動ですよ。

(十月二十二日)